

大寺の龍尾寺（おおでらのりゅうびじ）

それは、それは遠い昔のお話じゃ。

下総（しもうさ）の国の印旛沼（いんばぬま）の地方では、雨が一粒も降らず、来る日も、来る日もお日様がキラキラと照りつけていたそう。

「ああ、いつまで、この日照りは続くんじやろう。このままでは、わしらの食べ物も尽きてしまうわ」

「あしたこそはなあ、雨が降んねえかなあ」

村人たちの願いもむなしく、日照りは続き、飢えで死んでしまう者も、出て来る始末じゃった。

このことを知った天皇は、釈明（しゃくめい）というお坊さんに雨乞（あまご）いの祭りをやって、雨を降らせるよう命じたそう。

早速、釈明は印旛沼に船を漕ぎ出して、沼の真ん中で、“海龍王経”（かいりゅうおうきょう）などを読み続けて、龍神様（りゅうじんさま）に、お祈りをした。

それは、それは、命がけのお祈りだったそう。

一日、二日、三日と、釈明の声は絶えることなく沼のあたりに響き渡ったそう。

すると、どうでしょう。三日目の夕方、ちょうどお日様が地面にかくれる頃のことじゃった。

「ザザザザーッ」

ものすごい波の音とともに、沼の中から龍神様が現れたのじゃった。

やがて天に舞い上がり、暮れゆく空の中に姿を消したそう。

と、その時じゃった。

突然、真黒な雲が地面から、もくもくと舞い上がって、いなずまと雷鳴の中で渦巻きが起こったそう。

「ポツリ、ポツリ」

天から大粒の雨が落ちてきましたと。だんだん雨は激しくなって、一日二日と降り続いた。

今まで、ひび割れしていた田んぼも、枯れ草同様の畑の作物も、生き返ったと。

「助かった。助かった」

「ありがたいことだ。ありがたいことだ」

村人たちは、天にも昇る思いで、手を合わせ、読経（どきょう）したそう。

七日目。その日は特にすごい雷光（らいこう）と雷鳴（らいめい）の日じゃった。

「びかっ」

「ズーン。バリバリバリッ」

天も地もふっ飛ぶような雷鳴が、とどろき渡ったそう。

「ああ。龍の体が……」

村人たちは、一瞬、凍りついたように立ちどまった。三つに裂けた龍の姿を見たのじゃった。

私たちが救ってくれた龍……。

村人たちは三つに裂かれた龍の体を捜しに出かけたそう。

すると、二本の角のついた頭は安食（あじき）に、腹は本埜（もとの）に、尾は大寺（おおでら）に落ちていたのが見つかった。

「あらたちの身代わりになってくれた龍よー」

「わしらの神様じゃー」

変わり果てた龍を見つけた人々は、それぞれの地で供養することにしたのじゃった。

頭部は、石の唐櫃（からびつ）に納めて龍角寺（りゅうかくじ）の堂前に埋めた。腹は、本埜の地蔵堂に納めた。尾は、大寺の寺に納めたそう。龍角寺（りゅうかくじ）、龍腹寺（りゅうふくじ）、龍尾寺（りゅうびじ）とそれぞれ寺の名前になったと。

原話 房総の民話、千葉県歴史、北総誌史

（匝瑳市）